身近なまちの風景物語(40)

堪能する贅沢

この連載も最後になった。

風景の背後には必ず何らかの物語がある。それを読み取ることを心がけると、まちを歩く楽しみが増す。意識して上下左右に目を向けると、様々なモノやコトを発見することができる。

昨日なかったものがある、去年あったものが今年はない、朝と違う色になっている、春先と違う大きさになっている。ふとしたきっかけで気づくこともある。

さてそれはどうしてか。その背後にある「？」を考えてみる。そして想像する。正解を確認する必要はない。思いを巡らすこと自身を楽しみたい。

まちの楽しみ方はいくつもある。テレビ番組で見かけるようになった俳句や水彩画もおもしろそうだ。十七文字に、その場面の風景やそれに向き合う自分の思いを盛り込んでみる。あるいは目の前の風景から何を描いて、何を描かないか、色彩はどうしようかと、頭の中で思い描いてみる。イメージトレーニングも慣れれば苦にならない。

気持ち次第で、まちは心の遊び場にもなる。まちから受ける刺激。ふと意識すれば小さな感動がある。小さくても驚きがある。新しい発見は新鮮な心持ちになる。

できるだけ平易なことばを選び、熟語やカタカナを避けてきたが、あえて横文字で表すと、serendipityと言えそうだ。素敵な偶然に出会ったり、予想外のものを発見したりして、ふとしたきっかけに幸運をつかみ取る力が身につくかもしれない、と思う。

まちを見る目が変わり、まちを楽しむことができると、まちに出るのが待ち遠しい。小さな発見を求めて、のんびり歩き巡るのも悪くない。自分自身の贅沢を堪能したい。

編集者の要望もあり、挿絵のもとになった場所はすべて茨城県内です。一つでも気になったことがあれば似たような場所を探してみてください。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

野中 勝利
筑波大学　大学執行役員　芸術系長　教授

挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程２年）